

国際マネーフローレポート No.90

米国の対外証券保有状況

【目次】

- I. 今月のトピックス
～米国の対外証券保有状況
- II. 国際金融市場、国際マネーフローの動向
 1. 主要先進国の金利と為替相場
 - 政策金利 ○長期金利 ○金利差と為替相場
 - 実質実効為替相場 ○株価、実質 GDP 成長率、インフレ率
 2. 世界の流動性
 - 世界の外貨準備 ○世界の通貨当局の米国債・政府機関債投資残高
 - 主要先進国合計のマネーサプライ
 3. 中国とロシアの貿易収支
 - 中国の貿易収支 ○ロシアの貿易収支
 4. オフバランス取引での円ポジション
 - シカゴ通貨先物市場での投機筋による円のネットポジション
 5. 日本をとりまく資本移動
 - 対外証券投資 ○対内証券投資
 6. 米国をとりまく証券投資
 - 対米・対外証券投資 ○海外資本の米国債保有残高
 7. 世界的不均衡
 - 米国の経常収支赤字 ○米国の貿易赤字 ○ドル相場
 8. アジアの株価・為替相場
 - 株価 ○為替相場

三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社

調査部 主任研究員 塚田 裕昭

〒105-8501 東京都港区虎ノ門 5-11-2

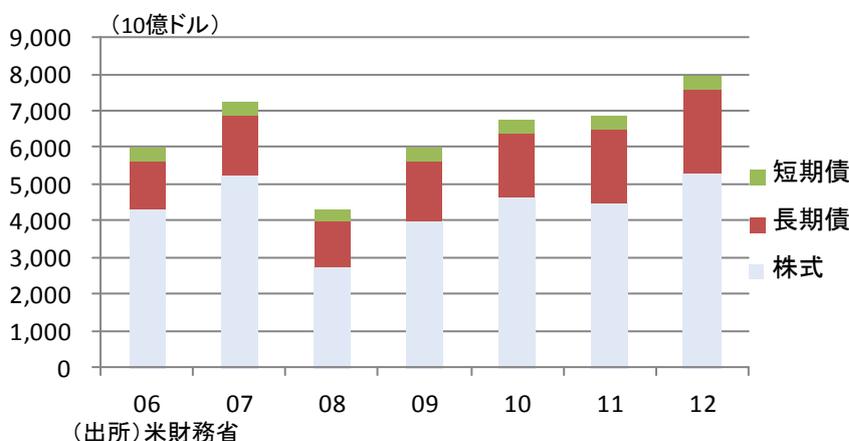
TEL: 03-6733-1070

I. 今月のトピックス～米国の対外証券保有状況

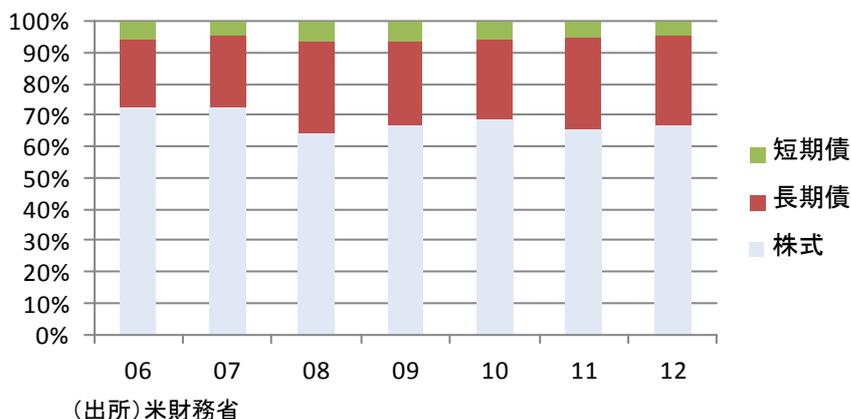
10月31日に米財務省が公表した「米国の対外証券投資状況（確報）¹」によると、2012年12月末時点での米国の対外証券投資残高は総額で7兆9,410億ドルと、2011年末に比べて1兆1,000億ドル増加し、リーマン・ショック前の残高である7兆2,200億ドル（2007年12月末）を上回った（図I-1）。

証券種類別の内訳をみると、株式が5兆3,120億ドルと最大のシェア（66.8%）を占め、長期債、短期債と続いている。リーマン・ショック直後の株価の大幅な落ち込みとその後の戻りにより、株式残高は2008年以降、2011年末を除いて年々増加してきており、そのことが、米国の対外証券投資残高の増加に寄与してきてはいるが、一方でリーマン・ショック以降の危機対応のため各国の国債が増発される中、長期債への投資残高も増加、証券別での長期債のシェアが高まっている（図I-2）。

図I-1 米国の対外証券投資残高（時価ベース）



図I-2 米国の対外証券投資（シェア）



国別の投資額をみると、英国向けが1兆1,290億ドルと最大の投資先となっており、カナダ（8,080億ドル）、ケイマン諸島（7,970億ドル）、日本（5,210億ドル）、フランス（3,750億ドル）と続いている（図I-3）。投資先上位を占めるのは、先進国、オフショア先が中心となっている。

長期証券（株式+長期債）への国別の投資額の推移をみると、英国、ケイマン諸島、カナダ向けは2008年末をボトムに残高を増やしてきているが、日本向け、フランス向けはほぼ横ばいとなっている。特に日本向けは、2012年末時点でまだ2008年末の水準を回復していない（図I-4）。この結果、リーマン・ショック前は、英国に次いで2位であった日本向け投資額は、2012年末時点では4位となっている。

¹ Report on U.S. Portfolio Holdings of Foreign Securities as of December31,2012

図 I-3 2012 年末の米国の対外証券投資残高（国別）

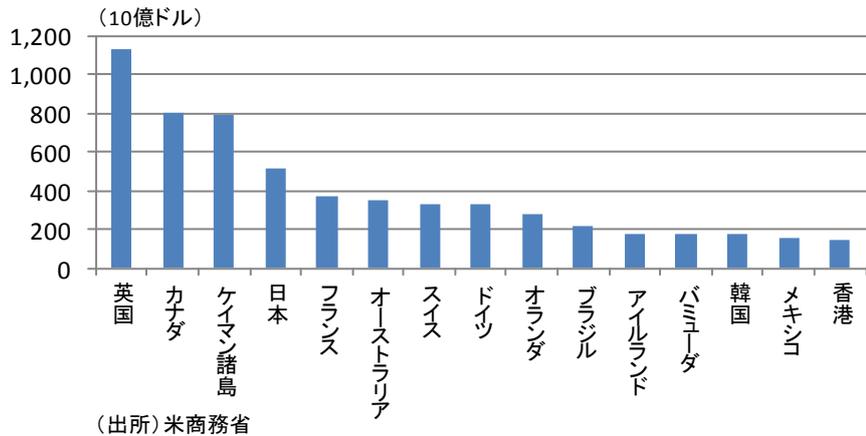
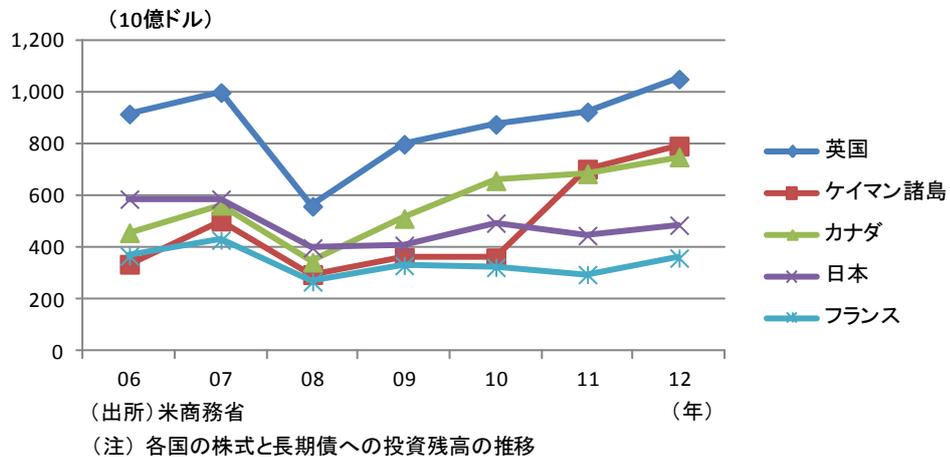
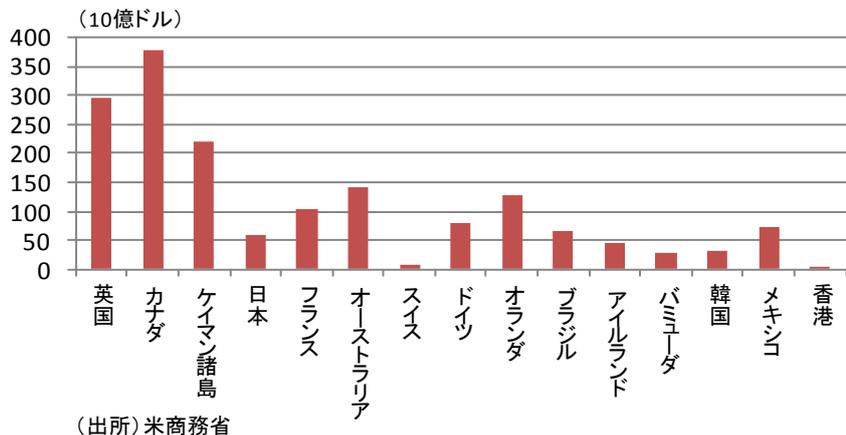


図 I-4 米国の長期証券投資残高の推移（国別）



米国の対日投資の動向に関しては、他国向け投資に比べて、株式の比重が高く長期債の比重が低いことが指摘できる。長期債への投資残高をみても、2012 年末時点で 610 億ドルと他の上位先国と比べて低い水準となっている（図 I-5）。長期債の投資と言え、代表例は国債投資と考えられるが、金利が著しく低いこともあって、日本の国債は米国の投資家にとってあまり魅力的ではなかったようだ。

図 I-5 2012 年末の米国の長期債投資残高（国別）



II. 国際金融市場、国際マネーフローの動向

1. 主要先進国の金利と為替相場～ECBが政策金利を引き下げ

○政策金利

◆ユーロ圏

・ECB（欧州中央銀行）は、11月7日の理事会で政策金利（リファイナンス金利）を25ベーシスポイント引き下げ0.25%とした（図II-1）。

◆英国

・BOE（イングランド銀行）は、11月6、7日のMPC会合で政策金利を0.5%に据え置いた。また、資産買入プログラムの買入規模を3,750億ポンドに据え置いた。

◆米国

・FRB（連邦準備制度理事会）は10月29、30日に開催したFOMCで、モゲージ担保債券（月額400億ドル）と国債（同450億ドル）の買い入れを継続することを決定した。また、フェデラルファンド金利誘導目標水準を0～0.25%に据え置くことを決定した。注目されていたQE3の縮小については、前月に続き今回も見送られた。

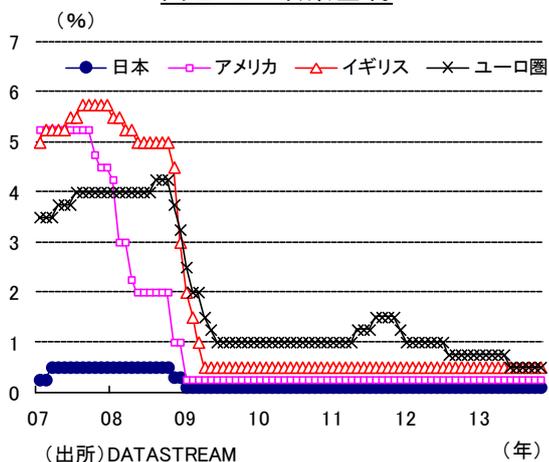
◆日本

・日本銀行は10月31日の金融政策決定会合で、「マネタリーベースが、年間約60～70兆円に相当するペースで増加するよう金融市場調節を行う」現状の金融政策の維持を決定した。

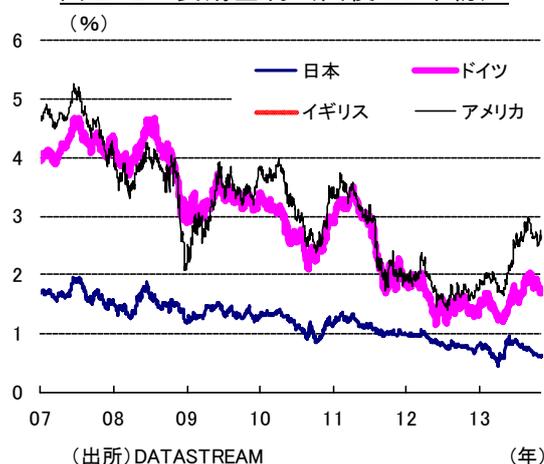
○長期金利（国債10年物利回り）

・10月の米、独、英など主要国の長期金利は、上旬は米債務上限問題の混乱の影響で上昇したが、債務不履行回避を受けて中旬以降は低下した（図II-2）。11月に入ってから、米国景気の改善を示す景気指標の発表を受けて債券が売られ、金利が上昇してきている。

図II-1 政策金利



図II-2 長期金利（国債10年物）



○金利（3ヶ月物）差と為替相場

◆日本と米国

- ・10月の短期金利（3ヶ月物）は、ドル金利が中旬まで横ばいとなった後低下、円金利が低下基調で推移した。金利差は中旬まで小幅拡大した後、縮小した（図Ⅱ-3）。
- ・10月のドル円相場は、1ドル=96円台から98円台のボックス圏で推移した。

◆日本とユーロ圏

- ・10月は、ともに小幅ながら、ユーロ金利は上昇基調、円金利は低下基調で推移し、金利差は小幅拡大となった（図Ⅱ-4）。
- ・10月のユーロ円相場は上旬にやや円高となったが、中旬以降、円安基調となった。

◆日本と英国

- ・10月は、ポンド金利はほぼ横ばい、円金利は低下基調で推移し、金利差は小幅拡大した（図Ⅱ-5）。
- ・10月のポンド円相場は一進一退で推移した。

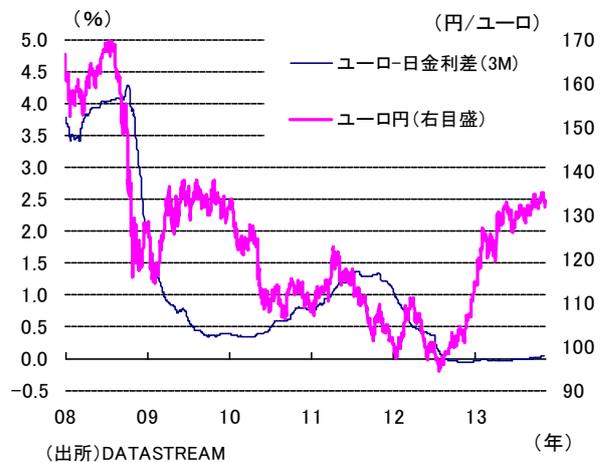
○実質実効為替相場

- ・10月の実質実効為替相場は、円が上昇、ポンドが横ばい、ドル、ユーロが低下した。

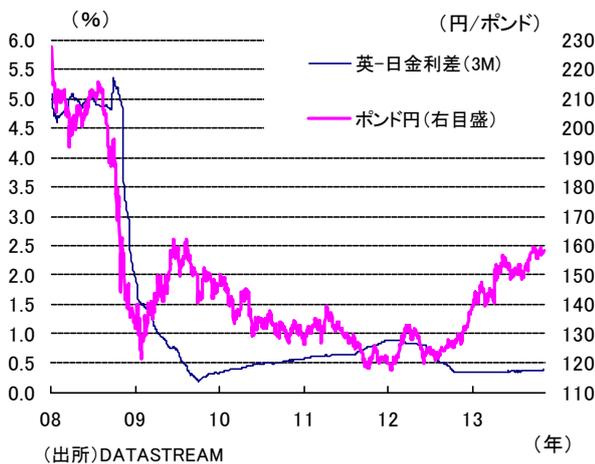
図Ⅱ-3 米-日金利差とドル円相場



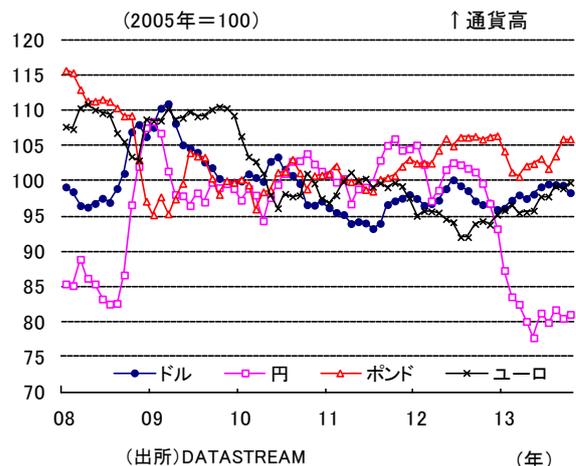
図Ⅱ-4 ユーロ-日金利差とユーロ円相場



図Ⅱ-5 英-日金利差とポンド円相場



図Ⅱ-6 実質実効為替相場



○金利やマネーの動きを左右する株価、景気、インフレ率

【株価】

・10月の主要国の株価は、総じて堅調に推移したが、日本株は下旬に下落し一進一退となった（図Ⅱ-7）。

【実質 GDP 成長率】

・米、英の7-9月期の実質 GDP 成長率（前期比年率）は、前期比でプラス成長となり、伸び率も拡大した（図Ⅱ-8）。日本は伸び率が縮小した。

【消費者物価上昇率】

・9月の消費者物価指数（総合）は、日、米、英、ユーロで前年比プラスとなった。（図Ⅱ-9）。英、ユーロは、10月も前年比プラスが続いたが伸び率が鈍化した。

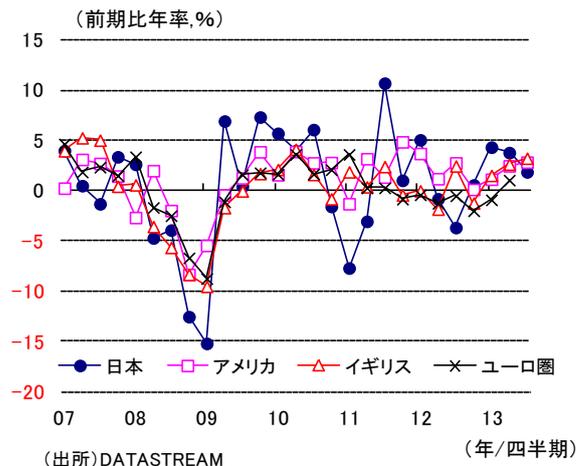
【原油価格】

・10月の原油相場（WTI、期近物）は、米国の景気減速観測が強まったことなどにより下落基調で推移した（図Ⅱ-10）。

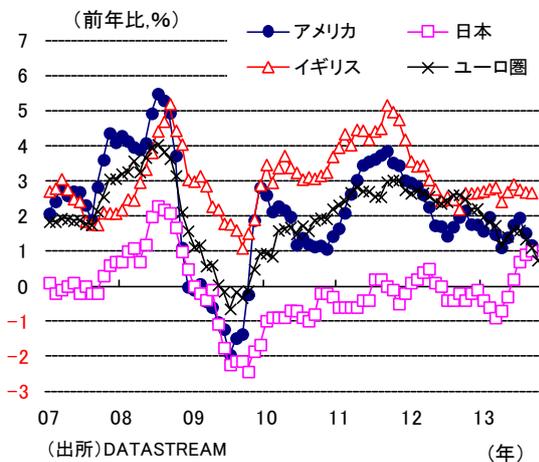
図Ⅱ-7 株価



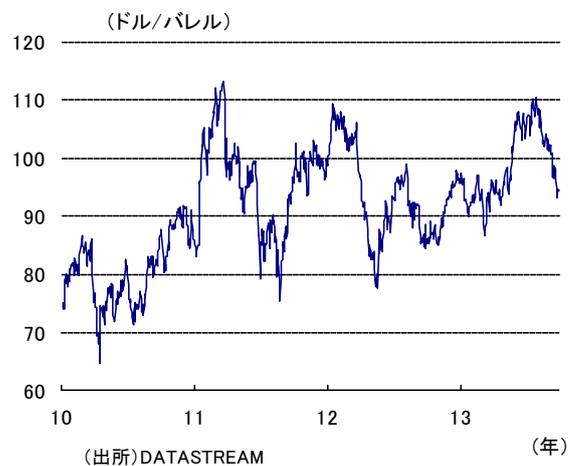
図Ⅱ-8 実質 GDP 成長率



図Ⅱ-9 消費者物価上昇率



図Ⅱ-10 原油価格 (WTI)



2. 世界の流動性～世界の外貨準備は対前年比で増加

○世界の外貨準備（通貨当局が保有する対外資産）

・世界の外貨準備は前年比で見て増加が続いているが、増加幅は縮小してきている（図Ⅱ-11）。アジア諸国の外貨準備は、このところ概ね横ばい圏で推移しているが、中国は足下で増加した（図Ⅱ-12）。

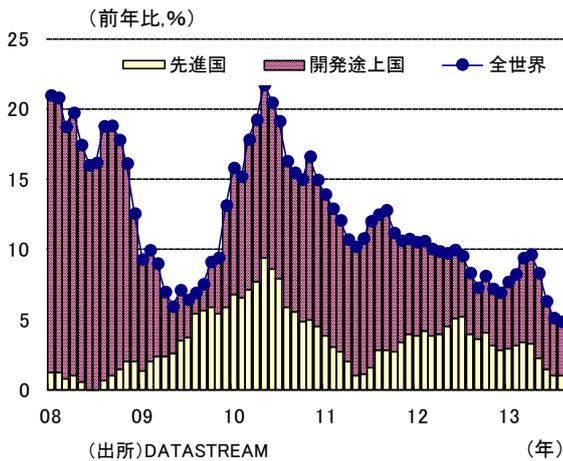
○世界の通貨当局の米国債・政府機関債投資残高

・9月の世界の通貨当局による米国債保有残高（FRB カストディ残高）は、前年比で4.7%の増加となった（図Ⅱ-13）。

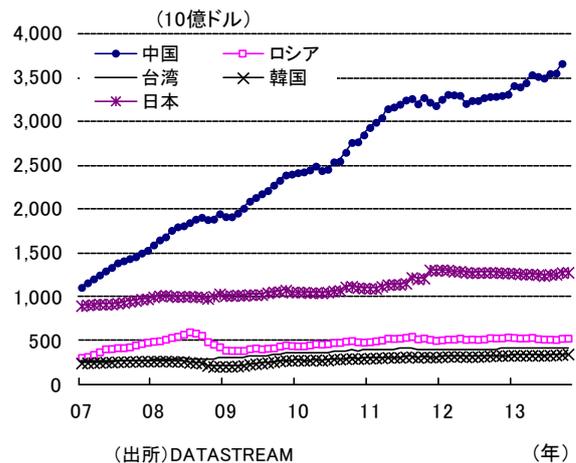
○主要先進国のマネーストック

・9月の日、米、ユーロ、イギリスのマネーストックは、いずれも前年比で増加した（図Ⅱ-14）。

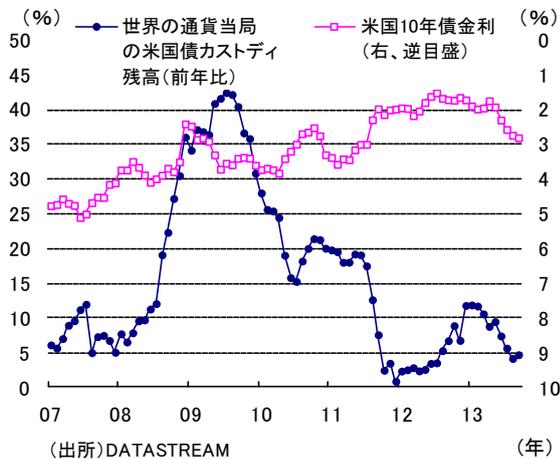
Ⅱ-11 世界の外貨準備（伸び）



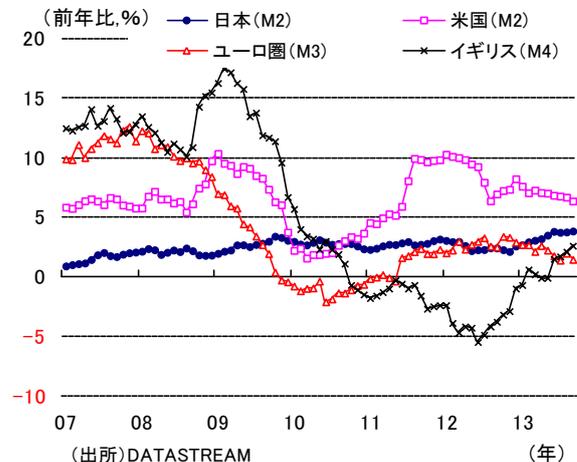
図Ⅱ-12 アジア諸国の外貨準備（水準）



図Ⅱ-13 通貨当局の対米投資と米国金利



図Ⅱ-14 先進国のマネーストックの伸び



3. 中国とロシアの貿易収支～10月の中国の貿易収支は前年比で減少

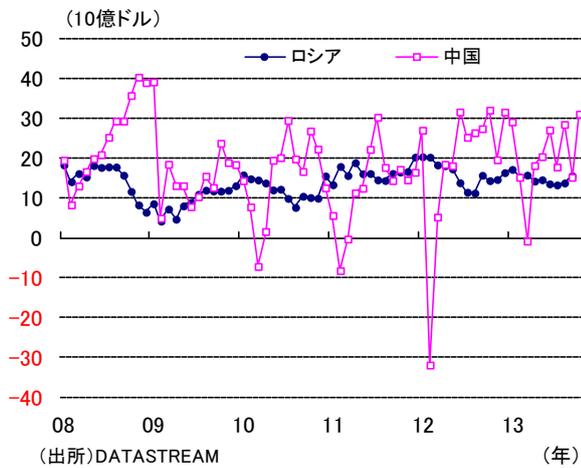
- ・10月の中国の貿易黒字は、前年比3.1%減の311億ドルであった（図Ⅱ-15）。
- ・9月のロシアの貿易黒字は、前年比0.7%減の156億ドルであった。

4. オフバランス取引での円ポジション～シカゴでの円ポジションは売り超

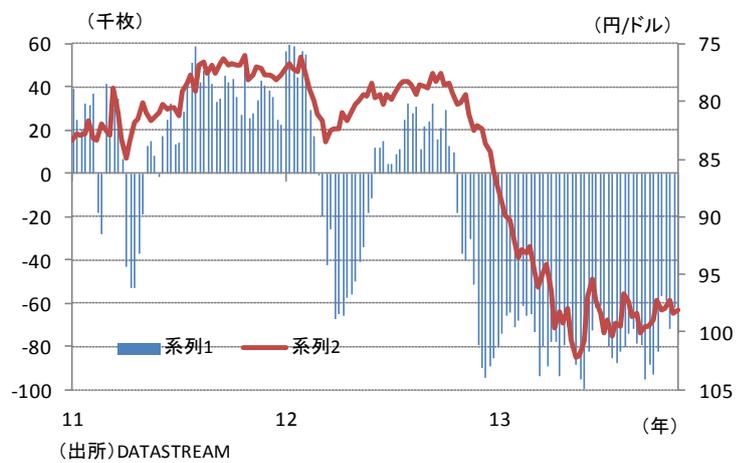
○シカゴ通貨先物市場での投机筋（非商業目的）による円のネットポジション

- ・シカゴ市場での円のネットポジションは昨年11月以降、売り超の状態が続いている。
- ・10月は上旬に売り超幅が縮小したが、その後、拡大に転じた（図Ⅱ-16）。

図Ⅱ-15 中国・ロシアの貿易収支



図Ⅱ-16 シカゴ先物市場とドル円相場



5. 日本をとりまく資本移動～10月は、資金流出

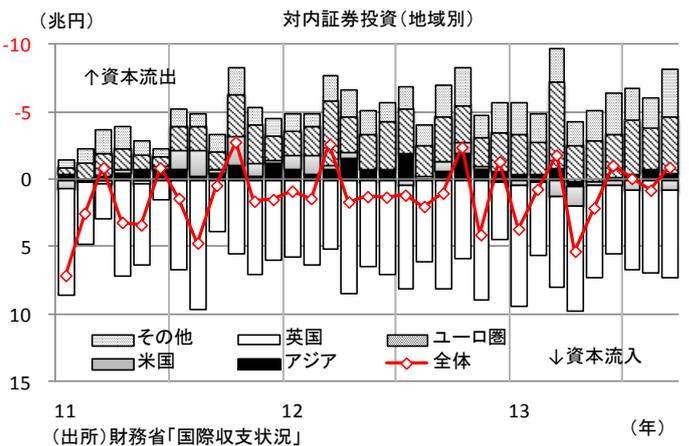
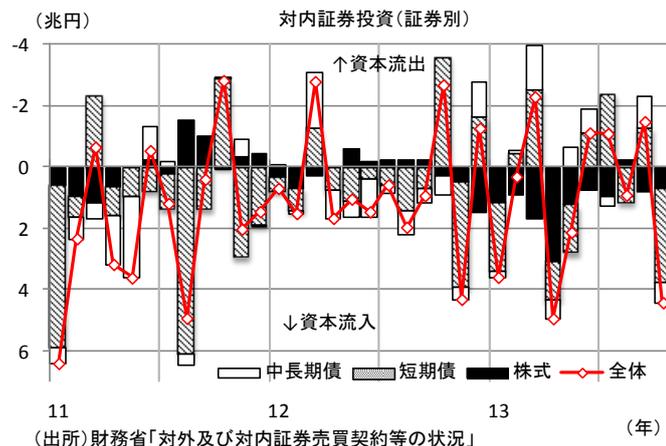
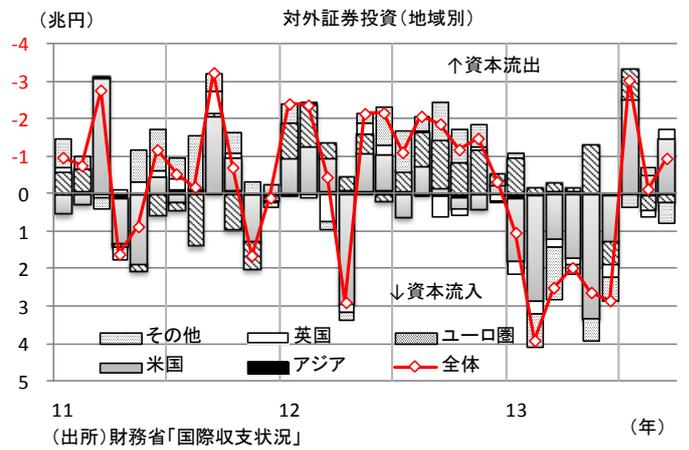
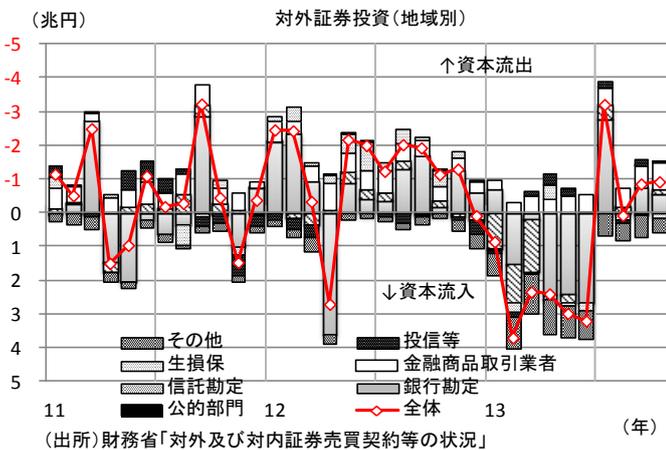
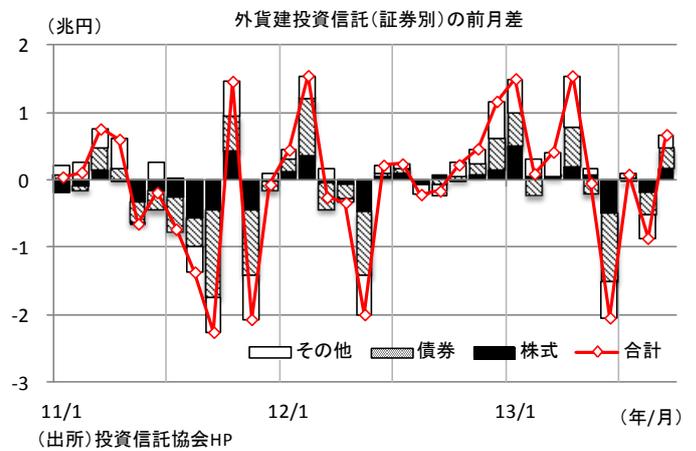
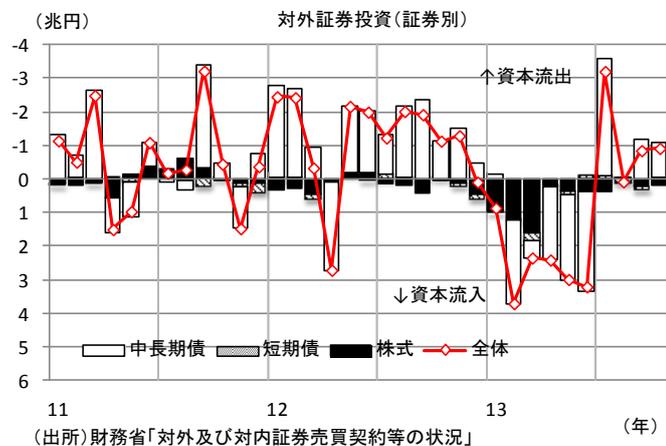
○日本の対外証券投資（日本人投資家の海外資産への投資）

- ・10月は9,169億円の流出超過（買い越し）となった。株式が売り越されたが、中短期債、長期債が買い越されて国外に資金が流出した。
- ・9月の外貨建て投資信託残高は、債券型、株式型、その他型のいずれもが増加し、トータルで前月に比べ6,738億円の増加となった。

○日本への対内証券投資（外国人投資家による対日証券投資）

- ・10月は4兆4,267億円の流入超過（買い越し）となった。株式、短期債、中長期債のいずれもが買い越されて、資金が国内に流入した。

II-19 日本をとりまく証券投資



6. 米国をとりまく証券投資～8月は2ヶ月ぶりに資金流出に

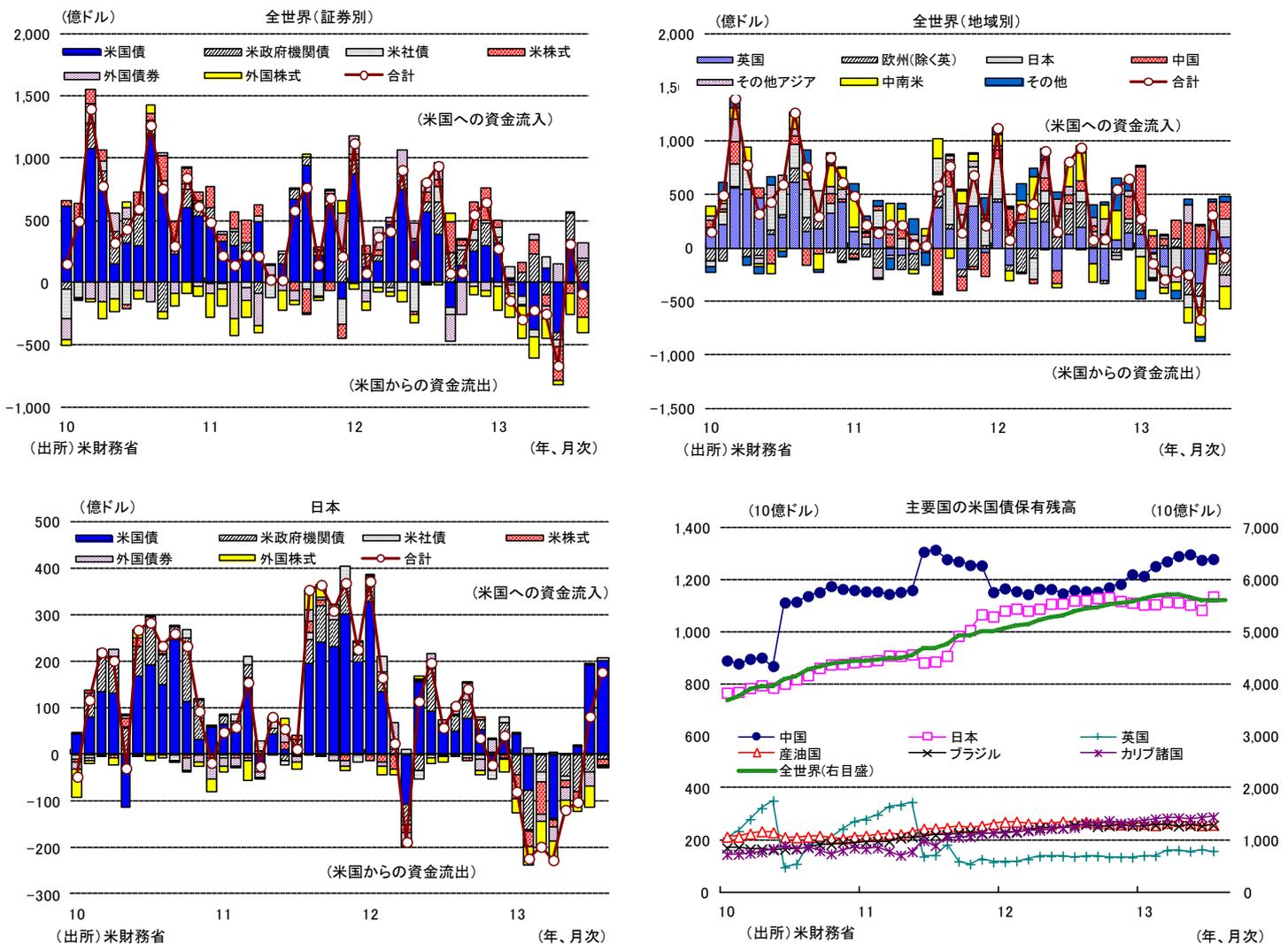
○対米・対外証券投資

- ・8月の海外資本による対米証券投資は、ネットで85億ドルの売り越しと2ヶ月ぶりに資金流出となった。政府機関債、社債が買い越されたが、国債、株式が売り越された。
- ・一方、米国資本は外国債券を売り越したが、外国株式を買い越してネットで4億ドルの資金を流出させた。
- ・このため、8月は差し引き89億ドルの米国から流出となった。

○海外資本の米国債保有残高（ストック）

- ・8月の海外資本による米国債保有残高は5兆5,888億ドルと前月比で減少した。
- ・ストック残高を国・地域別にみると、大きい順に、中国1兆2,681億ドル、日本1兆1,491億ドル、カリブ諸国3,005億ドル、ブラジル2,529億ドル、石油輸出国2,464億ドルとなっている。

図Ⅱ-20 対米・対外証券投資の動向



7. 世界的不均衡～米国の経常赤字（4-6月期）は前期比で縮小

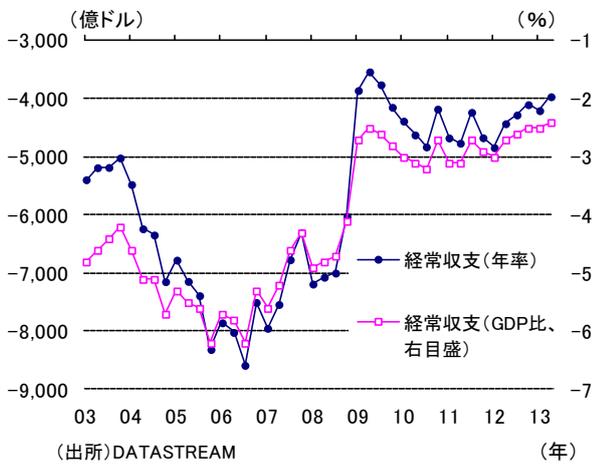
○米国の経常収支赤字（グローバルインバランス）

- ・2013年4-6月期の経常赤字は989億ドル（年率3,956億ドル、GDP比2.4%）と前期比で縮小した（図Ⅱ-21）。

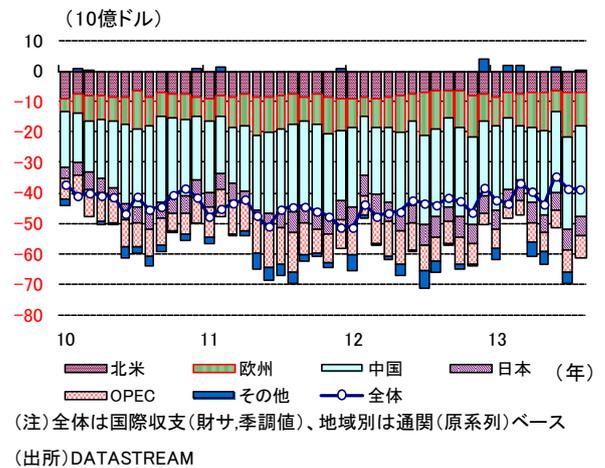
○米国の貿易赤字（国際収支・財サービスベース）

- ・2013年8月の貿易赤字は、388億ドル（季調値）と前月比で拡大した（図Ⅱ-22）。
- ・最大の赤字を計上している中国向けの貿易赤字は299億ドルと前年に比べて赤字幅が縮小した。

図Ⅱ-21 米国の経常収支



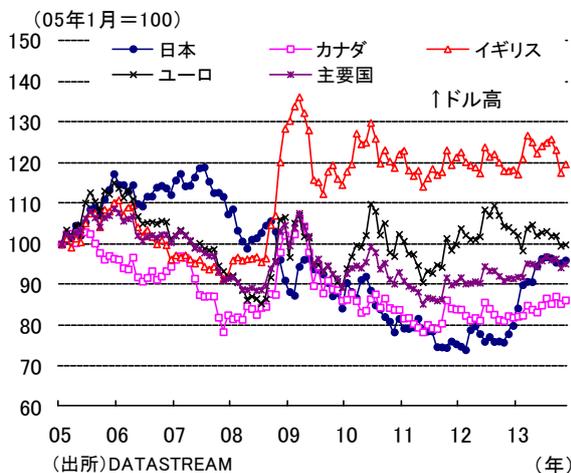
図Ⅱ-22 米国の貿易収支



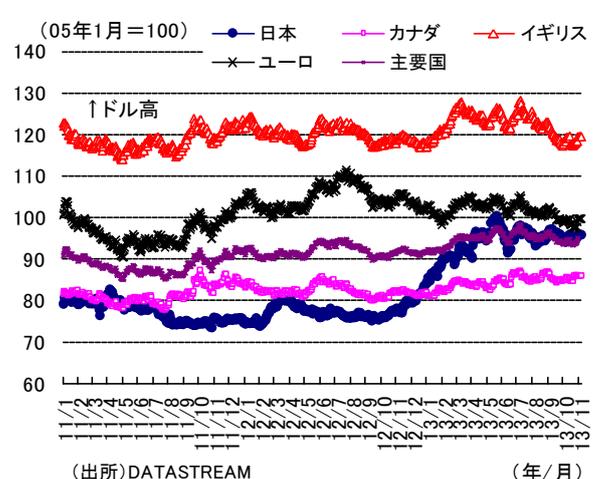
○ドル相場

- ・10月のドル相場は、対主要国でほぼ横ばい圏で推移した（図Ⅱ-24）。

図Ⅱ-23 ドル相場（名目、月次）



図Ⅱ-24 ドル相場（名目、日次）

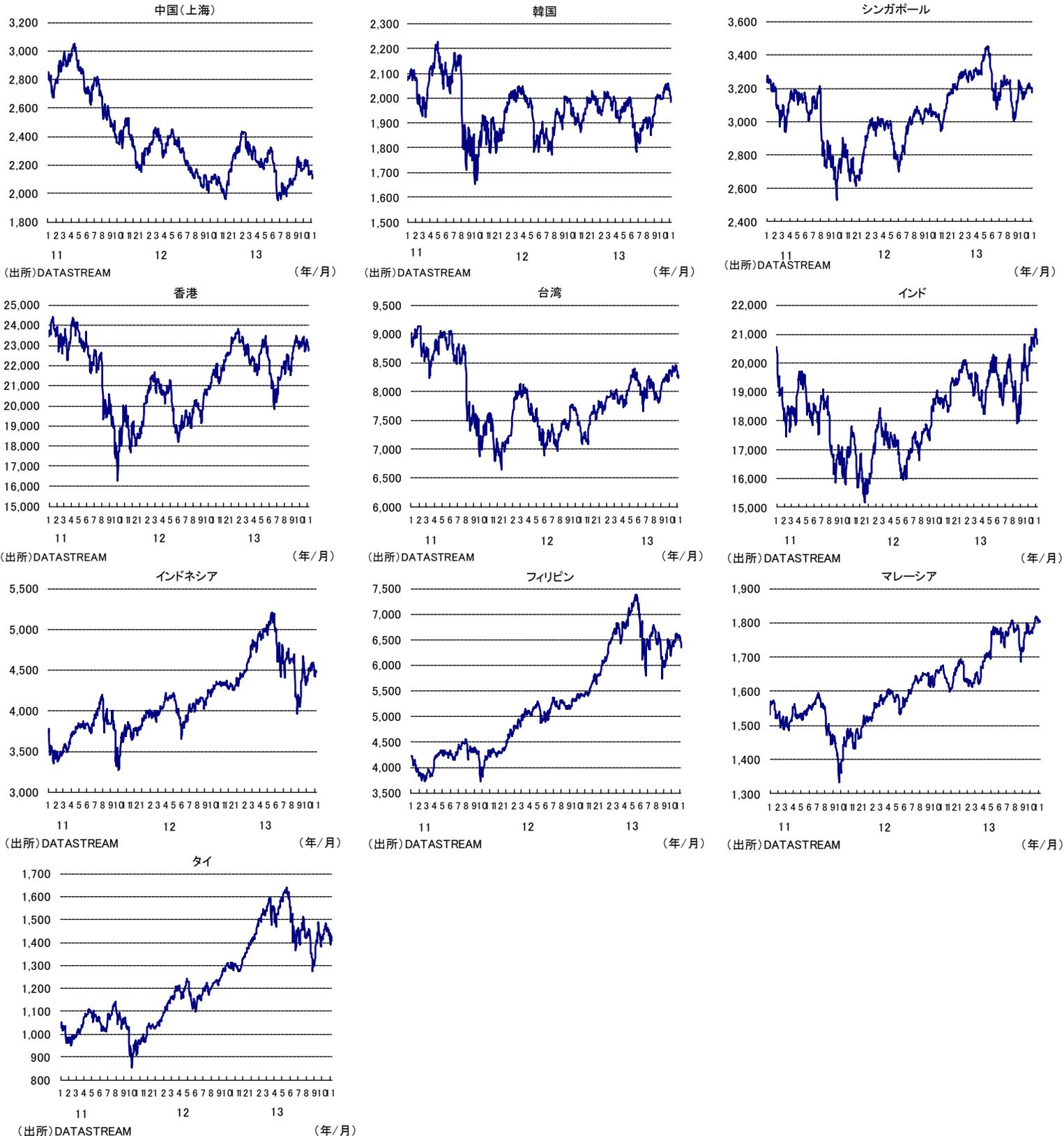


8. アジアの株価・為替相場～10月は、株は総じて堅調、通貨は対ドルで上昇

○アジア主要国の株価

・10月のアジア株は、総じて堅調に推移したが、11月に入って軟調な展開となっている（図Ⅱ-25）。

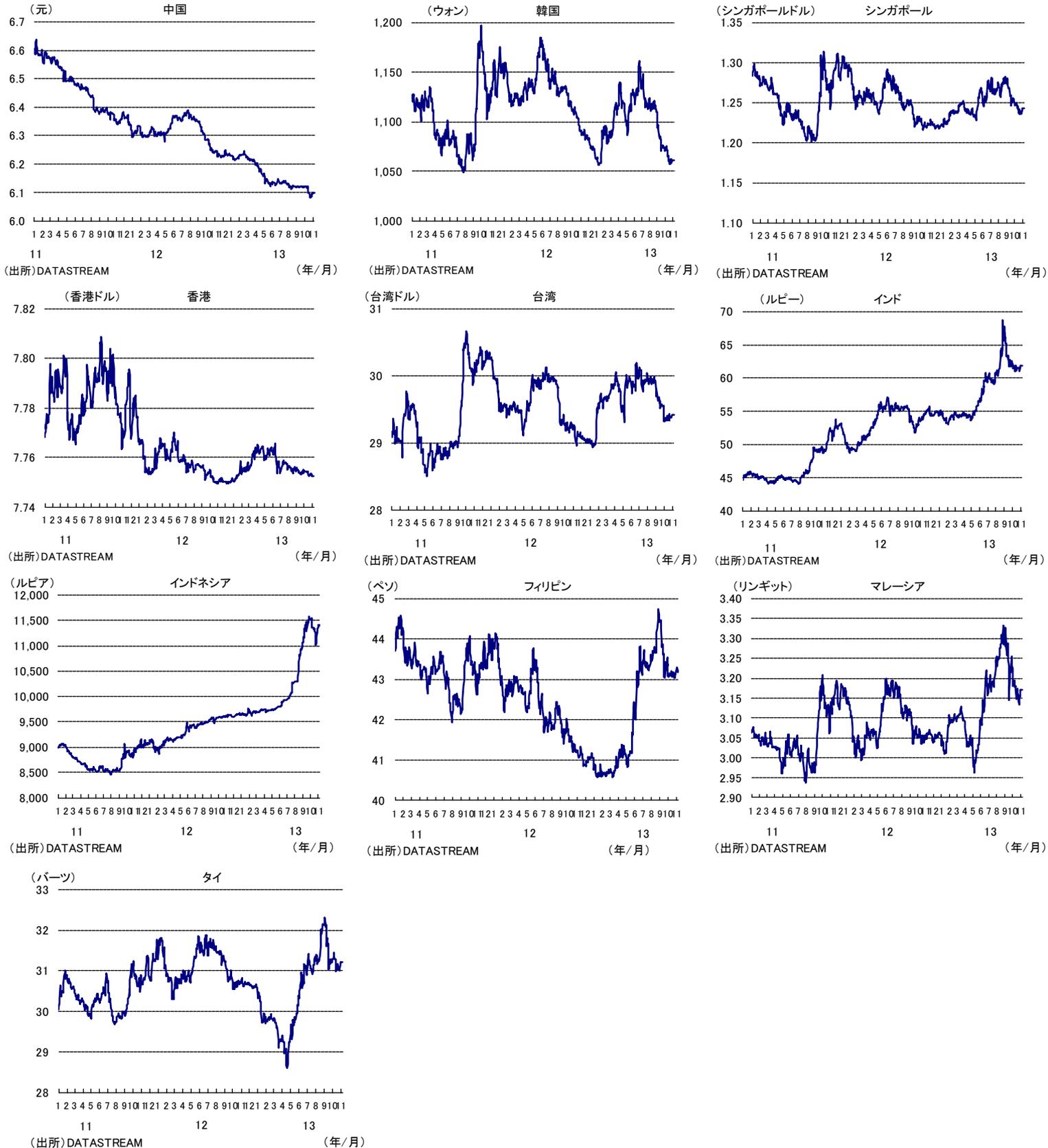
図Ⅱ-25 アジアの株価



○アジア主要国の為替相場

・10月のアジア通貨は、総じて対ドルで通貨高基調で推移した（図Ⅱ-26）。

図Ⅱ-26 アジアの為替（対ドルレート）



－ ご利用に際して －

- 本資料は、信頼できるとされる各種データに基づいて作成されていますが、当社はその正確性、完全性を保証するものではありません。
- また、本資料は、執筆者の見解に基づき作成されたものであり、当社の統一した見解を示すものではありません。
- 本資料に基づくお客様の決定、行為、及びその結果について、当社は一切の責任を負いません。ご利用にあたっては、お客様ご自身でご判断くださいますようお願い申し上げます。
- 本資料は、著作物であり、著作権法に基づき保護されています。著作権法の定めに従い、引用する際は、必ず出所：三菱UFJリサーチ&コンサルティングと明記してください。
- 本資料の全文または一部を転載・複製する際は著作権者の許諾が必要ですので、当社までご連絡下さい。